

# 博士論文審査及び学力の確認の結果

学位請求者 高垣 敏博  
学位請求論文 事象構造とスペイン語の受動表現

審査委員(主査) 川口 裕司



## <審査結果>

本論文は、スペイン語の動詞あるいは動詞句が固有にもっている「語彙アスペクト」の特性を詳細に観察し、語彙アスペクトを抽象化した構造として捉える「事象構造(event structure)」の視点からスペイン語の受動表現を中心とするいくつかの構文の形成過程を特徴づけたものである。とりわけ〈ser受動文〉に特徴的な統語意味論的制約と幾つかの談話的制限に関する部分は、理論的かつ精緻な言語分析を展開しており、スペイン語の〈ser受動文〉の特質を浮き彫りにしただけでなく、本論文の独創性が生かされた優れた考察である。

本論文は、本学大学院が学位授与のために定めた基準を十分に満たしているだけでなく、優れた高い学術性を示している。よって審査委員会は高垣敏博氏に博士の学位を授与することが適当であると判断した。

## <論文概要>

第1章の「語彙アスペクトと事象構造—先行研究」では、「語彙アスペクト」や「事象構造」研究の系譜を辿るとともに、それらをスペイン語文法に導入している先行研究を概観しつつ、本論文の議論の枠組みを提示している。

語彙アスペクト研究は Vendler (1967)にさかのぼる。Vendler は英語の動詞(句)の語彙アスペクトを、状態、活動、達成、到達の4つに分類した。Vendler の仮説は、その後の研究者により精緻化され、Pustejovsky は事象構造論を提唱し、動詞の抽象的意味構造を探る試みを行った。

スペイン語文法でも古くは Gili Gaya(1961)や Fernandez Ramirez(1986)の中に語彙アスペクトに注目した分析がみられる。近年ではとくに De Miguel(1992, 2000)や Morimoto(1998)らが語彙アスペクトの理論化を進めてきた。事象構造についても、Pustejovsky(1995)で提示された状態、過程、移行の3構造を8分類に敷衍する試みが Fernández Lagunilla & De Miguel(2000)によって行われている。本論文はこうした研究アプローチを採用している。

第2章の「スペイン語の受動文」では一般に3つに分類されるスペイン語の受動文のうち〈ser 受動文〉を中心に分析している。スペイン語の〈ser 受動文〉は〈se 受動文〉と異なり、その生産性の低さが特徴的である。先行研究ではその生産性の低さが何に起因するのか、どのようなメカニズムで〈ser 受動文〉が形成されるのかに関心が寄せられてきた。De Miguel(1992)は〈ser 受動文〉について2つの統語意味論的な特徴を指摘する。

第1に、完了相の動詞 *abrir*「開ける」を用いて〈ser 受動文〉を作るのは容易であるが、未完了相の動詞 *buscar*「探す」を用いて〈ser 受動文〉を作るのは困難である。

*La puerta fue abierta por Juan. vs ?? El libreto es buscado por Juan.*  
the door was (< SER) opened by Juan the script is (< SER) looked for by Juan

第2に、未完了相の動詞 *querer*「愛する」では〈por 動作主句〉「～によって」に制限がある。

*Juan fue querido por { \*su abuela / todo el mundo / todos}.*  
Juan was loved by { \*his grandmother / everybody / all}

De Miguel の研究を詳細に検討し、高垣氏は以下の仮説を提案する。

- 仮説 a. 〈ser 受動文〉は動詞が完了性の特徴をもつ場合に可能になる。  
b. 完了相の動詞では〈ser 受動化〉が可能で、動作主は単数・複数のどちらでもよい。  
c. 未完了相の動詞の〈ser 受動文〉は完了事態の継起的連続(反復事象)を表す。  
ただし動作主は複数性名詞が要求される。

第3章の「スペイン語の〈ser 受動文〉—活動動詞をめぐって」では、いま見た仮説への反例が提示される。以下の例では、未完了相の動詞 *conducir*「運転する」のような活動動詞を用いながら、単数形名詞 *un chófer*「運転手」の *por* 動作主を伴うことができる。

*El coche fue conducido por un chófer.*  
the car was (< SER) driven by a professional driver

この場合、動作主は単数名詞だが、一定の職能や社会的機能を担う「職業人」、すなわち総称としての「運転手」であること、さらに動作主と動詞の間に「目的役割」(Pustejovsky 1995)という意味的適合性が成立する。この意味適合が文に一般性(総称性)、すなわち反復可能性を付与し、複数動作主の要請に合う効果を生むと主張する。

続く第4章「スペイン語の〈不定形 ser 受動文〉」では、〈ser 受動文〉の本質を探求する。先行研究は動詞の「語彙アスペクト」と「時制アスペクト」を考慮することで〈ser 受動文〉の形成を説明した。ところが、「時制をもたない」はずの〈不定形 ser 受動文〉が存在する事実によって、高垣氏は「〈ser 受動文〉の形成に関わるのが基本的に動詞の語彙アスペクトだけではないか」と主張する。さらに高垣氏は、不定形と定形の2つのレベルの受動文の統語・意味的制限を探そうと試みる。結果として3つの現象を指摘する。

- ①母語話者への調査を行ったところ、「por 動作主句」についての仮説（上記の仮説 b と仮説 c）が、定形レベルでは予測どおりの結果にならないことが分かった。
- ②受動化における目的語の昇格は、不定形では主節からのコントロールで形式的に決まるのに対し、定形では「主題化」といった談話的制限に関わるためにより不透明であることが判明した。
- ③昇格目的語の意味が不定形に比べ定形では「自立的」である必要があり、より制限されている。

第5章の「〈estar+過去分詞〉構文」では、3つの下位分類を設けて、それぞれの形成過程を分析する。まず〈estar 結果構文〉は、行為が行われた結果状態だけを表し、por 句を欠くことなどから受動文と認められない。〈estar 受動文〉は動作主 por を伴うが、「関係概念動詞」と呼ばれる動詞のみが用いられる。最後の〈estar 受動結果構文〉には por 句に動作主性のない「場所概念主語」が現れるという特徴がある。このように〈estar+過去分詞〉の3つの構文をそれぞれ別のタイプとしつつ、いずれも達成動詞をその源泉として共有していることにより、相互に関連する連続体であると指摘する。

最後の第6章と第7章は、「受動文」そのものが対象ではなく、受動表現と関連する周辺の現象を扱っている。いずれも広義の「ボイス・態」に関わり、また事象構造がスペイン語の文法構造に影響を及ぼすあり方を観察するという点で本論と密接な関係がある。

第6章の「形容詞的過去分詞」は自動詞から作られる過去分詞を対象とする。分析の対象とした ir(se)「行く」、salir(se)「出る」、caer(se)「落ちる」、subir(se)「上がる」、bajar(se)「下りる」などの8つの「移動の非対格自動詞」は、どれも起点と着点の間を移動する移行事象をもつと考えられる。ところが〈estar 結果構文〉の形成については、大半が容認されず、caer(se)、subir(se)、bajar(se)の3動詞においてのみ容認されることが明らかになった。

第7章「非対格自動詞と〈se le 動詞〉構文」においては、再帰動詞に与格人称代名詞が加わる〈se le 動詞〉構文について、前章と同じ移動を表す非対格自動詞を主な対象として、与格人称代

名詞 *le* が移動の起点と着点のどちらに定位するかを論じている。個々の動詞事例の詳細な検討を通じて、第1章で提示された事象構造の枠組みがこの場合にも有効な説明原理になることを示している。

本論の各章では、動詞固有の「語彙アспект」および「事象構造」を出発点として、それが受動表現およびその関連現象の中にどのように反映されるのかが観察された。このように各章で述べる文法現象の核になる部分は、「語彙アспект」と「事象構造」への言及を抜きにしては論じられないことがわかる。高垣氏と共に、Pustejovsky (1991:48)の言葉を借りて言うならば、「文法現象とは実際のところ事象の内部構造に言及することにほかならない」のである。本論文は、スペイン語文法論においても、その主張が妥当であることを証拠だてている。

#### <審査概要および評価>

審査においてとくに高く評価されたのは以下の点である。

①高垣氏の論文は、文法的現象が事象の内部構造を参照しているという Pustejovsky の提案がスペイン語の多くの現象を説明するのに有効であることを示した。

②本論文は、最新の理論と多くの言語データの尊重とインフォーマント調査との間の素晴らしい均衡によって性格づけられている。

③スペイン語受動文の問題について、最先端にいる研究者との研究交流を行うことで、スペイン語〈*ser* 受動文〉の制限を、語彙アспектと時制の面から整理し、新たに、「行為者の総称性」という視点を導入した点が斬新である。今後のスペイン語文法論で、このテーマを扱うときには必ず引用されなければならない重要文献となった。

④〈*estar* 結果構文〉、〈*estar* 受動文〉、〈*estar* 受動結果構文〉のそれぞれの特徴づけと相互の関連付けは説得力があり、他の言語での受動文とその関連表現について考察のヒントを与えている。

⑤伝統的に別個の現象だと見なされてきた現象が、実際には関連する現象として分析を拡張され、特に最後の章では、これまで関連づけられることのなかった過程に分析が広げられ、同一の原理と操作に従っていることを示した。この論文は受動構造を中心に据えているが、事象構造の分析が受動構造だけでなく他の構造を説明するのに有効であることを示している。

このように本論文は研究テーマの妥当性、問題意識の明確さ、方法論的一貫性において優れており、本学の学位授与基準を満たす高い学術的論考とすることができる。

一方で、若干の点については疑問が提起された。

①上述のように、「語彙アスペクト」と「事象構造」を軸とした理論的枠組みで一貫して〈ser 受動文〉の形成可能性を論じているが、やはり情報構造が〈ser 受動文〉の容認性を左右するケースがあるのではないかと思われる。文の情報構造についてもさらに論議が望まれる。

②使用したコーパスが現代スペイン語を正しく代表しているかについての説明が必要であった。とくにスペイン語受動文の生起には文体差が関係することが予想されるので、コーパスは文体的要因をコントロールしなければならないと思われる。

上記の疑問点については、口述試験において学位申請者から適切かつ補足的な説明があり、審査員が納得する部分も多々あった。

以上のことから、審査委員会は最終的に審議をした結果、本論文は博士(学術)の学位を与えるにふさわしい学術的成果であると判断し、高垣氏の今後のさらなる研鑽に期待するという認識で一致した。